

末黒野

すぐろの

5月号 (通巻789号)



両手の杖

小川玉泉

贈られしあかぎの杖や日脚伸ぶ
寒鴉誰のものでもなき朝日
霜柱生きて見栄張ることのなく
湯たんぽへ注ぐ湯たぎらせ稿を次ぐ

瞬かぬオリオン蒼く寒厳し
紙製の一合の升年の豆
霜解けの日を存分に菜のみどり
橋長し下行く水に溶くる雪
口癖の寒いの一語妻も言ひ
両の手の杖の軽さや露の臺
分身となりたる杖や犬ふぐり
梅仰ぐ両手の杖に身を支へ

閨

日

松本三千夫

臘梅や馳込寺の磴二十
玄関の疲れし靴の余寒かな
まんさくやかかつて村社の日溜まりに
砂を引く波や春立つ音たてて
結末なき夢の目覚めや亀鳴ける
風音に優る瀬音の雨水かな
一瞥し閨の底ひへ恋の猫
溜池や竹林春の閨ためて
添削の朱筆進まず春の宵
春愁や対のこけしの胴くびれ
たまさかや二月二十九日の雪
遅二月十五日き梅一海師忌に間に合ひぬ

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

早梅

黒滝志麻子

嘘泣きを覚えし赤子日脚伸ぶ
突堤の突端の鵜の寒さかな
明日は絵になるやも知れぬ真夜の雪
風垣に子等の抜け道夕茜
満面に満つる四温の日差しかな
影のごと人きて佇てり冬桜
三寒の寄せ物多き茶懐石
道場の裂帛の声寒明くる
雨欲しや人に岬の早梅に
薔薇の芽やもと居留地の白亜館

春の雪

田中臥石

畦道に夜火事明かりの消防車
ふるさとを捨てしにあらす豆を撒く
立春の白湯喉通り病癒ゆ
春の雪積もりて朝の深轍
春泥を跳び来て笑めり浜少女
春の海荒れをり上総一の宮
薺摘みをりけり沖に漁船見ゆ
高層の東京句会や春のなみ
春蘭を抱へ普羅碑に参りけり
如月のひかりを回す車椅子



春
隣

大橋伊佐子

事故跡に濡るる花束寒の雨
邂逅の昂りありぬ冬桜
本題に触れず寄鍋つつきけり
ジャンパーや別れはいつも無造作に
一滴の水柱離るる光かな
竹林の匂ひ初めたり春隣
鴛鴦の水尾より春のひろがりぬ
隠沼の鈍色光る焼野かな
石ころに火の跡見ゆる末黒かな
雨に煙る末黒野匂ひ立ちにけり

二
月

清海信子

旧正や飾り掛けたる道しるべ
樹々に射す朝日の届き蕪汁
椀餅の色に力のおふれけり
挿す花の代り映え無き二月かな
粥吹いて余寒の眼ぬらしけり
寒もどり日輪水に貼りついて
東京に覚め淡雪に取り乱す
蠟涙に一筋の日矢春立てり
大きくしやみして臘梅の下通る
花終へし石菫の葉照りや義仲忌

乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）
太字は推薦句

露の臺

松田泰子

葉牡丹

森清

堯

隣り家も衝立のごと蒲団干す
星凍てて**月凍**てて**人遠**き**かな**
室咲や田舎料理の店灯る
寒灯に浮き来る人とすれちがふ
枯蔓へ枯蔓何かささやけり
投げ売りの広告ばかり春立ちぬ
せせらぎの子守唄とも露の臺

背を正す若き巡查や霜柱
潮風の抜くる谷戸道野水仙
抜き足に朽ち蘆もつれ冬の鷺
白息や憂きこと乗せて追ひやらむ
霜焼けの耳に久々妻の愚痴
葉牡丹や**とり**と**めの**な**き**見の**疑問**
鯉らしき形のぼやけ凍つる池



青炎集

横浜 饗庭 恵子

葉牡丹に久し振りなる豪雨かな
寒紅梅浅葱の空のすき透る
寒菊のすがれつつ色極めをり
初不動雲天心を流れをり
絵手紙の文字のかすれや春隣
凍つる夜や手帳に拾ふ未完の句

横浜 村上 浩子

日を溜めて浮寝百羽や鴨日和
街灯の等間隔の寒さかな
寒卵一人に一つ朝の膳
みどり子と積木遊びや春隣
虎落笛かの子歌集を夜更けまで
余寒なほ少し濃く淹れ夜の珈琲

小川玉泉選

横浜 青木 由芙

松過ぎの路地に槌音かな履
極寒の鍬はね返す朝の土
臘梅や雨の雫に色のせて
荒行の大音声や寒の水
時を眠る福竜丸や冬深し
大座主の撒ける福豆人の波

横浜 橋場 美篤

ダイヤモンド富士と出会へり旅始
まのあたり冬日を吞める富士の山
左義長の爆せて人の輪崩れけり
二分咲きの紅梅匂ひ空の青
裸婦像に日の斑風の斑春立てり
春昼や双子の眠る乳母車



横須賀

大川 暉美

一輪の剪るをためらふ寒牡丹

横浜

中山 良子

無口なる夫と小屋の冬毎

下萌や園児溢るる縄電車

畑打の土の命の黒さかな

天つ日の普き畑や草萌ゆる

綱干さる浦曲の浜の長閑なり

横浜

内藤 庫江

鴨あまた思ひ思ひの水脈ひきて

花散らすごと泉水にねむる鴨

旅立ちの芭蕉の像や春立ちぬ

鰐口の音青空へ春立てり

庭園の名石に添ひ路の臺

独りの間明るくなりぬ古雛

横浜

美田 茂子

霜柱鳴かせて干しぬ濯ぎ物

猫の眼の闇に光れる寒さかな

鴨の声響く川面の静けさに

冬日差こよなく浴びて筆供養

初観音海見ゆるまで足伸ばし

夫夫の空を持ちをり桜の芽

竜の吐く宮の蹲踞寒の水

寒椿富士は気高く聳えけり

牡丹の大輪兆す冬芽かな

佗助や蹲踞に射す日の明かり

寒木瓜の彩る谷戸の籬かな

薄氷やさくつと割るる京干菓子

横浜

谷貝 美世

猷園を自在に遊ぶ寒雀

寒行や素足の僧と足袋の僧

火の山や雪に包まれ鎮まれり

雪山や黒き岸壁際立てり

炉にほのと菊炭の香や茶会席

条幅の竹のひと文字冬座敷

横浜

波多野 孝枝

軸に鷹床に一枝の寒椿

路地裏の防火用水石路明かり

検査値を告ぐるマスクの医の眼

真つ先につくねの売れてちゃんこ鍋

単線の駅の薄日や笹子鳴く

踏み切りの音を吹き消し虎落笛

耕 土 集

松本三千夫選



芝田 幸恵

癌に効く野菜、シューズや冴え返る
立春のクラブ磨きて暮れにけり
富士仰ぎひとり祝へり紀元節
生焼^{づが}けの藻屑蟹搔^かき出す磯焚火
人魂のごと権瑞の群なして

横浜 土屋 実郎

水鳥の目覚めて白き波紋かな
料峭の川底の石鎮もれり
見て飽きぬ鯉の大口水温む
貌鳥を見し日の夢の華麗なる
やや若くなりて出かける春シヨール

丸山 治男

半沢 一枝

メモになき恵方巻買ふ春隣
使はれぬ皇紀偲ぶや紀元節
料峭や医師の指示より子の論し
天皇の御無事祈るや春北風
朝出しのごみの重さや凍返る

ぶつ切りの酢漬大根昼の飯
静けさに籠る団地や追儼の日
白梅の蕾弾けぬふたつみつ
荷解きの物の芽雪の匂ひかな
宮前や野梅の鉢の小商ひ

中村 弘

川崎 品川 古市

手を零れきらめき弾む竜の玉
虎落笛鷗杭より荒海へ
菜畑や二尺五間を黄で満す
日溜りに心ふくらむ露の臺
切岸の日溜り崩れ露の臺

商店主携帯耳に襦袍かな
雪の朝先づは下駄箱のぞきけり
長靴の埃はらへり雪の朝
酔醒めの一杯の水寒の朝
デパ地下の行列の先恵方巻